

日本バプテスト女性連合の機構改革の中でジェンダー課題を考える —日本バプテスト連盟との協働（国外伝道）の形を振り返りつつ

米本裕見子

はじめに

本年、日本バプテスト女性連合（以下、女性連合）は、前身である日本バプテスト婦人連合（以下、婦人連合）の誕生から数えて50年目を迎えた。今、日本バプテスト連盟（以下、連盟）と同様、高齢化による会員減少と財政課題を抱え、今年度より日本バプテスト女性連合（以下、女性連合）も「機構改革」に取り組み始めている。

女性連合が使命として掲げてきた「国外伝道」と「世界バプテスト祈祷週間（以下、世界祈祷週間）」について、これまでの連盟との「協働」を見据えながら、今後の形を模索する中で、そこに日本の家父長制イデオロギー¹に覆われた社会・文化と、それを後押しするような聖書解釈や言葉の影響も合わさった「ジェンダーに基づく不平等」の構造があるのではないかと考えるに至った。さらに米国南部バプテスト連盟・Southern Baptist Convention(以下、SBC)とその協力団体である米国南部バプテスト「女性宣教師同盟」・Southern Baptist Women's Missionary Union（以下WMU）の性別役割分担を内包する関係性を手本とした連盟と女性連合の関係性の中に、国外伝道献金のシステムが組み込まれてきたのではないかと考えるに至った。そこで本稿では「世界祈祷週間」を意識しつつ、連盟と女性連合の関係の歴史をたどりつつ、この構造的なジェンダー課題について考えてみたい。

婦人会同盟（独立組織）から連盟の婦人部へ

1920年、WMU（1888年創立）の「女性から女性への伝道」という方針のもと「日本バプテスト婦人会同盟（以下、同盟）」は、女性たちによる独立した組織として誕生し

¹天皇制は（それがたとえ象徴天皇であっても）男系家父長制原理に貫かれた、性差別、階級差別、民族差別、身分差別、障害者差別、異質な思想を排斥する差別のシステム・体系である、ということだ。（鈴木裕子、「天皇制とフェミニズム—『明治150年』を考える」『福音と世界』2018年8月号）18頁）

近代日本国家とジェンダー：明治政府は遊郭制度を近代的に再編成し、近代公娼制度を創出した。…娼妓になる子女たちは貧しい家に生まれ、「醇風美俗」の名のもとに身売りされた。公娼制度とはこのように女性の性を貶め蹂躪するシステムで、これが官許（公許）されていたわけである。…近代日本において女性は政治的権利や経済的権利を否定され、家父長制のもとに人権を蹂躪されてきた。…加えて女子教育では「婦徳寛容」をうたい文句に貞淑・従順・温良が推奨された。これらすべてが絡み合い、近代日本にあって日本の女性は人権がほぼ否定され、いわば家父長制化の「奴隷」として位置づけられてきたのである。（同、19～20頁）

た。しかし、その誕生には、男性の牧師たちの理解を得るために5年間を要している。同盟の結成には、来日した宣教師の妻で「補助宣教師」（ここにも米国南部バプテストに存在していたジェンダー差別が伺える）と呼ばれた女性宣教師たちの尽力の実があった。同盟の活動は、教会活動のみにとどまらず、女性たちの社会的地位の向上、解放と救い、やがて女子教育、幼児教育へと開かれていった。

1932年、「バプテスト祈祷日」が12月にもたれ、様々なアピールによって89円38銭が捧げられた。そのうちの3分の2が西部組合（現・連盟の戦前の組織）伝道部へ、また3分の1は婦人会同盟が支える「隣光舎」のために用いられた。当時は決して、教派組織としての西部組合に全てを捧げたのではなく、自らの働きのためにも用いたのである²。翌1933年10月の第14回婦人会同盟総会には、西部組合の理事長と伝道部長が出席し、世界祈祷日献金の感謝を次のように述べている。

「西部組合の内国、外国伝道のために献金を送られましたが、当時私たちにはそのような機関はありませんでしたが、皆さまの献金に心を動かされ、伝道委員会を設置し、...私たちは満州に伝道事業を始めたいと思っています。」

婦人会同盟からの献金によって西部組合に「伝道委員会」が立ち上げられたこと、そして戦争に向かう国策の時流に乗るかのように、その伝道先として「満州」という地名を挙げていることに注目したい³。

それに先立つ同年4月、西部組合第31回年次総会で「部制組織」が可決され、婦人会同盟は西部組合の「婦人部」として組み込まれることになった。

「14年間同盟は組合の婦人部として認められることを願ってきました。しかしこの二つの組織を一つにするような、はっきりした空気は見られませんでした。」

上記のように、この組み入れは西部組合の主導で決められたものであった。それでも、当時の原順子婦人部長の挨拶には、このことを喜びとして「特に婦人のみに与えられた方面に...専心努力いたしたい」としている⁴。この「婦人のみに与えられた方面」とは、女性たちがさらに「犠牲的な献金」の努力をするという決意ととらえることができる⁵。

その年（1933年）に守られた世界祈祷日献金（99円79銭）は、WMUから隣光舎への支援があったことを理由に、全額が西部組合に捧げられた⁶。その翌年からもWMUからの支援を受けながら、世界祈祷日献金は全て西部組合に捧げられている。そして1937年の献金は、西部組合に100円、満州伝道（西部組合は天野栄造牧師を宣教師として満州に派遣）に44円46銭を捧げている。

² 日本バプテスト連盟婦人部門編『バプテスト婦人 四十年の歩み』1962年5月15日発行、48頁より。

³ 同52頁。

⁴ 同58頁。

⁵ 金丸英子「私たちは神の同労者である」『世の光』2020年度10月号。

⁶ 『四十年の歩み』61頁。

1940年、西部組合は東部組合と合同して「日本バプテスト教団」となり、翌年には、キリスト教諸教派・団体が統合された「日本基督教団」に加盟、国の保護下に置かれる。西部組合と同様に女性たちも「婦人事業局」として、戦争協力・参加の道を進み、アジア諸国への侵略戦争の一翼を担った。

しかし他方、軍部の迫害を恐れて沈黙した8年間の反省の欠如、戦中の加害者意識を上回る被害者意識、『世界伝道』を掲げながら『アジアの婦人たちに対する配慮や、戦争責任の告白が一切見い出』せないとの厳しい批判も寄せられ、その姿勢がのちの連盟の「沖繩伝道」を「先頭に立って積極的に推進していった信仰の姿勢」の先取りとみる見方もあります⁷。

この点においては、今の私たち自身の課題でもあることを見逃してはならない。オンライン時代となった今、私たちはアジアの女性たち（ABWU・アジアバプテスト女性連合）とのつながりをますます大切に深め、機会があるたびに戦争責任の謝罪の思いを伝えつつ、ともに歩みたい。またアジアの女性たちとの出会いから、自然災害と経済格差により厳しい生活を強いられている女性や子たちの生活安定と安全を祈りつつ、支援する団体をサポートすることは、国際緊急支援とともに、これからの女性連合の重要かつ具体的な働きとなるであろう。

敗戦の荒廃の中、旧西部組合は日本基督教団から脱退。1947年、日本バプテスト連盟が創設される。その半年後の1948年、WMUの篤い支援を受け活動を再開した女性たちは、「連盟の婦人部」として、第1回総会を行い再会を喜び合った。その総会の記録には、WMUのSBCに対する協力体制を手本にした「神の精兵」として「会員一同心を合わせて祈り、つとめて伝道し、急速な発展を表すために、神命に従いできるだけ多くの献金をせねばならぬ」との覚悟を示している⁸。

戦前から戦後にかけて女性たちは、自ら積極的に献金をささげ教会活動に貢献することを、自分たちの役割として担い続けてきたのである。その背景には、戦後とはいえ家父長制また「男尊女卑」が色濃い社会の中、一人前と認められにくい弱い立場に置かれてきた当時の女性たちにとって、後方から支える女性としての存在（献金の働き）が、連盟（男性中心組織）から重宝されることが、無意識的な大きなモチベーションとなっていたのではないかと推察する。それは、自分たちが大きな「幹」の「枝」と自覚した、婦人会同盟から組合婦人部となった1934年から継続されてきたことがらだったといえるであろう⁹。

⁷ 『日本バプテスト連盟50年史』197頁、金丸『世の光』2020年10月号、17頁。

⁸ 金丸『世の光』2020年10月号16・17頁、『40年』89頁。

⁹ 金丸『世の光』2020年8月号、9月号16・17頁。

「連盟の婦人部」から婦人連合（独立組織）へ ～独立時の苦闘～

戦後も連盟組織の中の婦人部は「世界祈禱週間」献金の働きを、連盟の中でもともに推進し続けてきた¹⁰。

1970年、連盟の大きな機構改革（SBCからの自主独立）に伴い、信徒活動部門である婦人部は、壮年部・青年部・少年少女部門とともに連盟機構から切り離されることになった。当時の女性たちが、大いに戸惑い不安を抱えたことは想像に難くない。1970年12月、天城山荘で連盟機構改革委員3名と副理事長、婦人部代表15名が集い3日間の懇談会を行った。その記録には、次のような婦人部代表の言葉が収められている。

「連盟が自給するために積極的に協力する」「連盟全体のことを考えると現在の機構改革に全面的に賛成できない」「率直に意見をのべるのはより良いものを一緒につくって行きたいとの切なる願いから...機構改革委員の真剣な努力の結果を無責任に批評するものではない」¹¹

連盟総会で決議された後の1973年2月、ついに「日本バプテスト婦人会連合」（現・日本バプテスト女性連合）が発足する。この間、女性たちをけん引してきた松村あき子氏は、連盟理事会の理事（婦人部代表）として先述した連盟との対話の場をつくり、また婦人連合発足への準備（全国の教会に手紙を書く、訪問する、座談会を開くなど）を仲間たちとともに丁寧に進めた。先の座談会の中で松村氏は、このように述べている。

「むしろ終始一貫して『私たちの信徒活動は連盟の機構の中にとどめて欲しい』とお願いし続けてきたのです。...しかし、...次の二点に立って信徒活動を連盟機構から切り離すということが強調されました。1、信徒運動はどこまでも自主的なものである。2、連盟が自給化するためには大幅な予算削減が必要であり、信徒活動を育成する予算が計上できない。...そこで、私達はそのことを主の導きと受け止めて、婦人連合を発足させることになったわけです。」¹²

なんという潔さだろうか。その後、別の委員はこのように述べている。

「全然、新しいものを造るよりも、古いものを革新する方が難しいことだと思いますね。それで、これから私達は『以前はこうしていたのに……』ということのを止めて、新しい出発をしていきたいと思いますね。それは大切なことじゃないでしょうか。」¹³

この言葉は、まさに今現在「機構改革」に取り組む私たち・女性連合に向けられた励ましと共感の言葉のように飛び込んできた。連盟機構から独立し新たな組織として出発するという巨大な出来事に立ち向かい、不安と希望の中で粘り強く新たな組織づくりを成し遂

¹⁰ 日本バプテスト連盟機関誌『神の使者』昭和44年11月1日（土）（ママ）「今月の主題：地の果てまで」

¹¹ 『世の光』1971年2月号、29頁。

¹² 同、1972年9月号、16・17頁。

¹³ 同上

げた先輩女性たちからのエールのように響いてくる。

1973年2月の婦人連合発会総会で初代会長の松村氏は次のように経過報告をしている。

「昭和46年7月、日本バプテスト連盟第25回年次総会で、連盟の機構改革を伴う規約改正案が可決されたが、その目指すところは連盟の自立と、自立のための諸教会の協力であった。…信徒部門に属する各部を連盟の機構から外すことになった。」「…婦人たちによる計画立案、協議を行った。その後各牧師、婦人信徒間に婦人連合の使命と目的、および運動体の性質と活動内容の理解を深める努力を続けた結果、1月末現在で116教会、28伝道所婦人会の加盟意思表示があった¹⁴。」

婦人部は決して自ら、連盟を離れようとしたのではない。しかし、連盟機構から離れることを受け入れてからの切り替えの早さ、その決断と実行力に尊敬の念を禁じ得ない。連盟の婦人部から婦人連合へ、生みの苦しみを経験しつつ、祈り・協議を重ね、選択・決断の中から確実に新たな組織を形作る、その一步を踏み出したのである。この間、当団体機関誌である『世の光』に記録された言葉は、これまで積み重ねてきた歴史と当時の時代の中で紡ぎ出された決意であり、現在の女性連合（婦人連合）の土台となってきたことがわかる。

連盟機構から離れてもなお、具体的な活動として婦人部時代から受け継いだのは「世界伝道」の使命であり「世界祈祷週間」の推進活動である。その活動と祈りは、女性たちに求心力と一致、喜びをもたらした。そして連盟の良き協力団体であり続けようとした。言い換えれば、男性リーダー中心の組織である連盟にとって、必要不可欠な存在として認められるためにも、女性たちによる信徒運動体の「世界祈祷週間」献金活動を手放すことは考えられなかったのではないかと推測する。松村氏は先述した座談会で次のようにも述べている。

「私達としても決して、今後とも連盟から離れて勝手なことをしようとはしていません。むしろ今迄より以上に緊密な連絡を保って活動したいと願っています。それですから、『婦人連合規約』の前文のところにそのことを明記しているわけです¹⁵」。

そして、現在の女性連合の規約前文は次のとおりである。

「この規約は、日本バプテスト女性連合が日本バプテスト連盟と友好的連帯関係を保つ団体として、自主的に活動し、宣教の進展に寄与し得るために定めるものである¹⁶。」ここに独立当時の、連盟との強い関係維持を願う思いを見て取ることができる。それは、女性連合・女性会メンバーは同時に連盟のメンバーであるというアイデンティティの両面性とも繋がっているのかもしれない。

¹⁴ 『世の光』1973年4月号、8頁。

¹⁵ 『世の光』1972年9月号、17頁)

¹⁶ 日本バプテスト女性連合ハンドブック、12頁。

ジェンダー課題から観る機構改革～これまでとこれから～

婦人連合が誕生した 1970 年代は、高度経済成長のただ中であり、あらゆるものが進化し勢いを持っていた。しかし、ジェンダーによる役割分担と家父長制家族主義は色濃いままであった。繰り返しになるが当時、連盟機構から切り離されるということには、「見捨てられた」ような、自分たちだけで本当にやっていけるのだろうか、という心細さは拭いきれなかったと思われる。その中で、女性たちがその存在を輝かせることができたのは少年少女、「女子青年」の信仰訓練に加え、何よりも「世界祈祷週間」献金の働きであったのだろう。だからこそ、当時はこの「連盟に捧げる」という形・構造について、性的役割分担がジェンダーに基づく不平等を帯びている、という視点を持つことができなかつたのも致し方なかつたのではないか。その上で、この 50 年の女性たちの働きに心から感謝と敬意を表するものである。

しかし他方で、本当の「自主独立」とは何かを考えずにはいられない。女性たちは、どこか精神的に連盟に頼り続けることを是としてこなかつたのだろうか。また、連盟も「国外伝道」の資金・財政面（献金推進）については女性たちの役割とし、それを当然としてきたのではないか。「2000 年信仰問題」の際には、SBC の信仰宣言に対し、連盟も女性連合も抗議の手紙を送ったが、それ以降も SBC と WMU の関係のあり方を、そのまま組み込んだ男女役割分担（女性は補完的立場）を表す構造を見直すことにならなかつた姿勢を、どのように考えるか。これからの連盟と女性連合は、ジェンダー的課題を抱えるこの構造に対しどのように対応するのだろうか。

金丸英子氏は、2020 年度『世の光』の連載「私たちは神の同労者である」で次のように述べている。

「先の紹介した声明（補足：連盟『70 年性差別を悔い改める声明』（参考資料②）を自ら（補足：女性連合）にひきつけて読む時、この 50 年が『ジェンダーに基づく性差別』が『教会形成や伝道者養成等、連盟総体としての施策に関わる部分において公然と』行われ、『組織的・構造的に性差別に加担・容認してきた』連盟の歴史と重なっていることに気がつきます。つまり、声明の内容はそのまま女性連合を始めとする、教会の女性たちにも関係する出来事であって、他人事ですませることはできない、ということになります¹⁷。」

「ジェンダー差別に基づく性差別」を自覚する・しないに関わらず、全く「他人事」ではないことの具体的で組織的な例の一つに、この「世界伝道」「世界祈祷週間」の構造的な課題が挙げられる。女性連合は「世界伝道」を使命とし、その具体的な活動として「世界祈祷献金」を推進し祈りと献金を集め、そのほとんどを連盟に捧げてきた。連盟はその献金をも

¹⁷ 金丸英子、『世の光』2020 年 4 月号、17 頁。

って「連盟派遣」として宣教師たち国外の働き人をサポートしている。すなわち、連盟が「国外伝道」活動として派遣を実施し、人事を含め国外伝道に関わる活動と予算執行の決定権を持っているのである。そして、「法人格を持たない女性連合は派遣の主体ではない他団体」という理由から、施策決定のプロセスと決定権から女性連合は除外されてきた事実をご存じだろうか。つまり連盟の国外伝道の活動は、女性連合からの世界祈祷献金によって成立しているにもかかわらず、女性連合（の事務責任者）は、ただ一教会員としての立場で連盟・国外伝道専門委員会の一委員であり、それ以上でも以下でもない。多くの女性会会員はこのことを知らず、私自身、事務責任者として今の働きに就くまでは、この構造的な課題にしばらく気がつかなかった。

近年、世界祈祷週間の献金額が目標額（予算）より減少し続け、連盟の補正予算の大幅な修正の必要が毎年課題となった。そのため連盟総会議場において、しばしば女性連合は質問や時に非難の対象となった。連盟総会は、言うまでもなく女性連合とは別団体の総会である。そして、ほとんどが男性の空間であった。その場所で、私は毎年、冷や汗をかきながら答弁した。今思えば、おかしい事であったが、その一連の事柄は、毎年恒例の景色になっていたと思う。ある年、この議場での代議員からの発言について連盟宣教部と理事会に疑問と抗議を訴えたが、残念ながら中々取り合われなかった。その中に、無意識の「ジェンダー差別」が流れているのだろうと感じ、時間がたつほど「おかしい」という思いが募った。時間はかかったが、宣教部から謝罪を、また翌年の連盟総会の中で理事長より謝罪を受けた。

しかしながら、この構造的課題のもとでは女性連合は軽視されていると言わざるを得ないことが繰り返される。「連盟の国外伝道の施策決定」について女性連合は「部外者」ということで線引きをされ、決定権またそのプロセスに入ることができないからである。連盟の良き協力者であろうと献金活動を熱心に祈り進めてきた女性たちが、軽んじられているように思われた。また、この構造が続く限り、女性たちはどこまでも連盟の後方支援者であり続けることになる。ジェンダーによる役割分担（不平等）を再生産し続けるシステムの中に置かれ、まさに私自身がこの不平等の再生産を推進していることになってしまう、と感じた。

連盟組織の中にはもちろん女性たちも含まれているため、これまで述べてきたような構造について単純にジェンダーの課題とは言いきれない、と思う人もいるだろう。加えて「信徒運動体」と「連盟」という関係性も絡み合う。

しかし少なくとも女性連合は、歴史的に小さな存在とされてきた「女性」たちによる団体である。この時代、私たちは、まずはジェンダーに基づく不平等に敏感になり、対等な関係性を構築することによって、本当の「協働」の実現にむけた「機構改革」を望みたい。その責任は、女性連合と連盟の双方の対話と理解と責任にあると考える。

現在、連盟の主導ではあるが機構改革の一つとして「これからの国外伝道委員会」をつくり、その中に女性連合のメンバー3人も参加し協議を重ねている。その中で新たな「世界宣

教委員会」を立ち上げる方向である。その委員会のメンバー構成は、連盟と女性連合から半々となるのが望ましい、と考える。しかしながら、「連盟の下」にある委員会となり、機構改革後も「連盟主体」の派遣や活動となるのであれば、さらに女性連合の世界祈祷週間献金を主な活動資金とし続けるのなら、これまでのジェンダーに基づく役割分担の構造は変わらず、再び意思決定プロセスから女性連合は外され、ジェンダー不平等の再生産が続くことになるのではないかと危惧している。何のための機構改革なのか、何のための「性差別を悔い改める声明」なのか、何のための「謝罪」なのか。

私たちは（男性も女性もそれ以外の性も）みなジェンダーに基づく役割分担・不平等を個人の内面に、そしてこの社会に溶け込ませてきた。そしてこの国外伝道の構造も 50 年間、問われることなく続いてきた。女性連合（女性たち）が責任を負う立場になれるかと問われた時、反射的に女性たちは一歩あとずさりするのも当然かもしれない。これまで「受け身」で生きることを余儀なくさせられてきた（またその生き方を受け入れてきた）からである。それでも、機構改革を本当の改革としていくには、女性たちも「責任」を請け負っていく覚悟が必要である。

しかしながら今回の改革の要旨は、女性たちが単独で責任を担い、主体となろうとするものではなく、これからの連盟と女性連合が「対等」な関係のもとで「協働」するための土台整備である。連盟と女性連合がともに責任を担い、できる範囲でできる限りのことを、足りない部分は補い合い知恵を出し合えば、十分に対等な関係で協働できる宣教委員会を生み出せるのではないだろうか。

おわりに

婦人連合となって 50 年、バブル経済が破綻して 30 年、日本の社会は大きく変化し、閉塞感に満ちている。家庭でも外でも女性たちは働き忙しい。女性連合の主要世代は 60 歳代以上という高齢化で会員の減少は止まらない。先を考えるとつい悲観的になりがちであるが、これまでの 100 年、女性たちは諦めず、つながりを喜びとして歩み続けてきた。

この「時代の転換点」に、私たちは、これまでのあり方を問いつつ、これから先を見据えて、方向転換するために「機構改革」という良い機会が与えられている。そしてこの機構改革について、少しでも早く多くの方々と共有・対話し、ともに作り上げていきたい。

最後に、近年「うちの教会は、女性会を解散した」「役員や実行委員の担い手がない」などの声をしばしば耳にする。また「わたしはジェンダー差別など受けたことがない」という言葉を聞くこともある。しかし、これまで述べたように、この社会では、いまだ家族主義を軸とするジェンダーに基づく不平等は、構造的にも個人レベルでも存在している¹⁸。キリスト教界、バプテスト連盟においても「女性」たちを含むジェンダーマイノリティが生きづ

¹⁸ 世界経済フォーラム（WEF）によると 2022 年度の日本のジェンダーギャップ指数は 146 ヶ国中 116 位。

らい状況にあるのではないか。安心して言葉を交わし合い、励まし合う場は必要であり、そこで、ともにジェンダーについての気づきを広げ、痛みに共感する思いをもって連帯していくことを願う。

女性連合は、ジェンダーマイノリティを含め、すべての「女性」を排除することも加入強制もしていない。そして、これまでのような「女性連合＝世界伝道」という強固なイメージから、緩やかなつながりの中で、世界宣教を大切にしつつすべての世代の「女性」たちがエンパワメントされることを願う。そこから、自分らしく自律して、神の愛を分かち合いともに生きること（福音宣教）へとひらかれていきたい。

これまでのバプテスト女性たちのジェンダー課題への取り組みに心から感謝しつつ、これからもさまざまな立場を超えて女性たちがつながり、この課題に向き合えればと思う。そこには「男性」たちとの対話と理解も不可欠であろう。近視眼的な改革ではなく、この先へと続く「女性」たちの真に「自主独立」した信徒運動体となり、あらゆる差別から解放され、互いのいのちを尊重（人権尊重）していく群れとなる道を求めたい。今回の機構改革をよい機会として、「世界宣教」においても連盟との対等な協働関係をともに目指していきたい、と願っている。

末筆ではあるが、このような学びの機会をくださった宣教研究所と、拙稿の校正においてご協力くださった西南学院大学神学部の金丸英子教授に心からの謝辞を申し添える。

（よねもとゆみこ／日本バプテスト女性連合幹事、東京北キリスト教会協力牧師）

※参考① 戦後の日本基督教協議会（NCC）の活動とジェンダーについて

「すべての暴力を克服する 10 年 2001-2010、フォーラム Part9—いのち いとおしんでいますか？— 基調講演：教会における女（わたし）たちの歩みとこれからの課題—ジェンダーとセクシュアリティの視点から 発題：大嶋果織」

・大規模伝道、大衆伝道を大事に考えていました。…つまり、戦後の日本に真のデモクラシー、民主主義を根付かせるために基督教伝道が不可欠であったということ。みんなが基督教に回心していけば、日本は本当の民主国家になるのだという意識があったわけです。…これからは、軍事的に東洋の指導者になるのではなく、精神的・宗教的に東洋の指導者となっていこうと考えていたわけです。（同上 6 頁）

・70 年代前後の結婚家庭セミナーでは「未婚者は結婚、既婚者は家庭」と結婚するのが人間として当然のことであるという意識が非常にはっきりしていた。また、「キリスト教的ではない俗悪な出版物」や俗悪な「禁酒禁煙」「純潔教育」もされていた。

「女は“キリスト者男性”を—教会の結婚相談にみる」というように、結婚相談所も開設され教派を超えて情報交換されていた。（同上 12 頁）

・「家庭生活運動の影響が今日まで続いている、それがセクシュアリティに関連する分野での差別に繋がっているということをどう総括していくかは、残された課題として今後に取り組んでいかねばならないと思います。」（同上 14 頁）

※参考②『連盟 70 年の歩みから性差別の歴史を悔い改める』声明

日本バプテスト連盟は、1947 年 4 月に結成してから 70 年を迎えました。私たちは、私たちの間に様々な違いがあることを、イエス・キリストの福音ゆえに喜び、尊びます（ガラテヤ 3：28）。しかし、その違いに優劣をつけ、力の差として利用し、支配・被支配の関係性を生じさせる時、あらゆる差別が起こります。差別は、その人らしさを否定し人権を侵害し、人の「いのち」を傷つけ殺します。

性差別には、ジェンダーやセクシュアリティに関するもの、そして性暴力などがあります。とりわけ私たちは、ジェンダーに基づく性差別を、教会形成や伝道者養成等、連盟総体としての施策に関わる部分において公然と行ってきました。私たちは、このような性差別を生んできた構造を省み、悔い改めることを通して、私たちの内に潜在するあらゆる差別についても気づき、学び、悔い改め、今後も決して容認しないことへの決意を新たにします。

私たち日本バプテスト連盟は、イエス・キリストの福音による解放を世に伝えるとともに、従来日本の様々な価値観と批判的に向き合い、相対化することに努めてきました。それにもかかわらず、私たちは、連盟内における男性中心の構造については、批判的考察のないままに保持し続けました。むしろ、それを利用してきたとさえ言えます。この構造は、基督教教会が長らく受け継いできた信仰理解や教会理解、聖書解釈にも内在し、私たちはそれらの影響も強く受けてきました。そして、この信仰や教会理解、聖書解釈は、

米国南部バプテスト連盟の「2000年信仰宣言」に如実に表れました。女性は男性の権威と主導権を侵さない限り教会で教えることができるといった一元的な聖書解釈のもと、私たちは女性たちを講壇から、あるいは意思決定機関から排除しました。教会や連盟諸機関における男性中心の構造が待遇や雇用形態、職務内容における男女の明らかな差を生み出し、それを見過ごしにしてきました。このような性差別の構造のもとで教育を行い、女性が男性の後ろに下がる態度を美德とし、幼児教育や音楽などの働きこそが女性が活躍できる領域と見なす意識を強化してきました。さらに台所での奉仕などを女性に限定することが多くありました。これらの価値観を受け入れる、受け入れないということで、女性たちの間に様々な分断や不要な軋轢を生みだしました。特に神学教育の場、あるいは牧師招聘の場での性差別は顕著でした。本人や教会の召命理解とは無関係に、多くの女性献身者の選択肢を女性という属性を理由に狭めました。こうした組織的・構造的な性差別は、「すべての信徒はひとしく福音宣教にたずさわる」（1979年日本バプテスト連盟信仰宣言）というバプテスト教会の理念とは、相容れないものです。しかし私たちは、痛みを負った当事者が勇気をもって声を上げるに至るまで、否、声が上がってもなおしばらくの間、信仰的理念と実際の教会形成や連盟施策との間の齟齬に無頓着でした。

私たちはこの歴史の中で、連盟として組織的・構造的に性差別に加担・容認してきたこと、そして、それを長い間、意識できず、放置してきてしまったことを、神のみ前に明らかに致します。このような構造を反省し、改めることに鈍感であり、無責任であり続けました。それどころか痛んでいる方がたに赦しや表面的な和解を強いてきました。多くの出会い、学びや気づきを経て様々な取り組みがなされていますが、組織の構造や個人意識、生活に根付いた性差別は、簡単に払拭できるものではありません。現在の社会の状況は、その体制維持のために都合のいい差別を再び強める傾向があります。それゆえ私たちは、常に間違いを起こし得る存在だという自己認識を持ち、他者を自分よりも優れたものとして向き合う姿勢をもって、主の導きのもと、今ここから前進したいと願います。私たちは、私たちが差別し、排除し、嘲笑さえしてきた方がたに、今心から謝罪します。私たちがイエス・キリストの福音の要請に背を向け、教会や社会に温存されてきた性差別に批判的に向かいあつてこなかった故に、今この声明文と一緒に読む可能性を奪われた方がたに、心を痛めつつ謝罪します。差別によって傷ついてきた方がたの声に真摯に聴くことこそ、真の和解への道につながると信じます。私たちは、長きにわたる連盟の歩みの中に、性差別の歴史が大きく根深く横たわっていたことを改めて神に告白し、一人ひとりが、教会が、また連盟という組織自体が、神のみ前に新たな存在として立つことを宣言します。私たちが、十字架と復活の主から学び、その福音に真に生かされるものとなるように、主の助けを祈ります。

2017年11月17日

日本バプテスト連盟第63回定期総会

【引用文献・参考資料】

- ・日本バプテスト連盟婦人部門編『バプテスト婦人 四十年の歩み』1962年5月15日発行
- ・日本バプテスト連盟機関誌『神の使者』昭和44年11月1日（土）「今月の主題：地の果てまで」
- ・金丸英子「私たちは神の同労者である」『世の光』2020年度4月号～3月号
- ・鈴木裕子、「天皇制とフェミニズム—『明治150年』を考える」『福音と世界』2018年8月号
- ・朴思郁 女性連合研修会講演「女性連合の宣教理念をめぐって—自宣教化を考える」2022年2月14日
- ・「動き：あなたは機構改革をどう思いますか—みんなで考えましょう—」『世の光』1971年2月号
- ・「第25回 婦人大会報告 主題 すべてを主に 187名の出席者を得て盛会」『世の光』1972年7月
- ・「座談会：新発足の婦人連合を考える」『世の光』1972年9月
- ・「動き：新しい婦人連合をめざして 地方連合担当委員 臨時委員会」『世の光』1972年11月
- ・「連合ニュース：一人歩き始めた日本バプテスト婦人連合 —“世界伝道”の使命のもとにどう 全国婦人信徒活動 第一歩を記す— 日時 昭和48年2月6日（火）【ママ】 場所 東京バプテスト教会」（発会総会） 『世の光』1973年4月
- ・「連合ニュース：日本バプテスト婦人連合第1回総会・婦人信徒大会 恵みのうちに終わる」『世の光』1973年10月